

## 武蔵野日曜集会

## 我に従え！

## ――ヨハネ伝第1章35～51節――

1994年3月6日

小池辰雄

キリスト従者 初めに行為ありき キリストの中に捨身 われに従え 天の門

## 【ヨハネ1・35～51】

<sup>35</sup> 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、<sup>36</sup> イエスの歩み給うを見ていう『視よ、これぞ神の羔羊』<sup>37</sup> かく語るをききて二人の弟子イエスに従いゆきたれば、<sup>38</sup> イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等いう『ラビ（釈きていえば師） いずこに留り給うか』<sup>39</sup> イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。<sup>40</sup> ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。<sup>41</sup> この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（釈けばキリスト）に遇えり』と言いて、<sup>42</sup> 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釈けばペテロ）と称えらるべし』

<sup>43</sup> 明くる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』<sup>44</sup> ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。<sup>45</sup> ピリポ、ナタナエルに遇いて言う『我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所に遇えり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』<sup>46</sup> ナタナエル言う『ナザレより何の善き者かいづべき』ピリポいう『来りて見よ』<sup>47</sup> イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、これ真にイスラエル人なり、その裏に虚偽なし』<sup>48</sup> ナタナエル言う『如何にして我を知り給うか』イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまゑに我なんじが無花果の樹の下に居るを見たり』<sup>49</sup> ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』<sup>50</sup> イエス答えて言い給う『われ汝が無花果の樹の下におるを見たりと言いしに因りて信ずるか、汝これよりも更に大なる事を見ん』<sup>51</sup> また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうゑに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』



## ●キリスト従者

<sup>35</sup> 明くる日ヨハネまた二人の弟子とともに立ちて、<sup>36</sup> イエスの歩み給うを見  
ていう『視よ、これぞ神の羔羊<sup>いづつ</sup>』<sup>37</sup> かく語るをききて二人の弟子イエスに従  
いゆきたれば、<sup>38</sup> イエス振反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を  
求むるか』彼等いう『ラビ（訳きていえば師） いずこに留り給うか』<sup>39</sup> イエス  
言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日  
ともに留れり、時は第十時ごろなりき。

聖書の文章は本当にムダがない。なぜムダがないかというと、キリストの言葉・行為  
それが中心で、それによって書かせられている。こっちが考えて書いているのではない。  
著者はキリストの言葉と行為なんです。それでムダがない。いわゆる説明的なものがない。  
事実そのものが語っているわけです。

洗礼のヨハネはキリストの歩いているのを――これは後ろ姿でしょうね――見て、

「視よ、これぞ神の羔羊<sup>いづつ</sup>」

と言った。キリストというひとの風格が何か普通と違う。ヨハネは預言者みたいです。こ  
の神の羔羊<sup>いづつ</sup>を視よ」ではない。

「視よ、これが神の羔羊<sup>いづつ</sup>だ」

ということ。神さまの懐にあるひと、その魂はいつも神の懐の中にいる。だから、羔  
羊なんです。親羊に抱かれてるわけです。

<sup>37</sup> かく語るをききて二人の弟子イエスに従いきたれば、

従わざるを得ないことになる。あとをついて行く。信するのではない、従う。

我々はよく「信仰」と言いますが、「信仰」の世界ではダメなんだ、従う世界です。もし  
信の字を使うなら「信従」です。付いて歩いて行かなければダメなんです。頭や心でただ  
信じたってどうにもならない。だから、キリスト信者<sup>しんじや</sup>なんてのはダメなんだ、キリスト従  
者でなければ。従僕です。我々はキリストの従僕である、従僕者である。信じているので  
はない。

「キリストは神の子である」

という命題を信じたってどうにもならない。

キリストとの関係は行為的なんです。キリストとの関係は行為的であって、頭や心で信  
じているというのはクリスチャンではない。キリスト者<sup>しすちや</sup>というのはキリストに従って歩い  
ている者です。これは非常に大事なことです。信者<sup>しんじや</sup>なんてのはダメなんだ、従者でなければ。  
我々は従者である。

「我に従え」

とキリストは言われた。「我を信ぜよ」なんて言っているのではない。だから、我々の日常  
生活はキリストに従って歩いていくことが大事です。



私の好きな讃美歌に「山路越えて」(404番)という歌がある。

「山路こえて ひとりゆけど、

主の手にすぐれる 身はやすけし。」

これは従って歩いている。「ひとりゆけど」とあるが、自分は独りであつてもキリストと二人なんだ。我々はキリスト信者でない。我々はキリスト従者である。もう今までのありきたりの概念を突破しなければダメです。

日曜日は安息日というけれども、キリストに出会ってキリストと一緒に歩く日なんだ。安息ではない。復活のキリストに従って歩いていく。だから、

「イエスの歩み給うを見て、二人の弟子イエスに従いゆきたれば」

と書いてある。

### ●初めに行為ありき

38 イエス振<sup>ふりかえ</sup>反りて、その従いきたるを見て言いたもう『何を求むるか』彼等  
いう『ラビ(釈きていえば師)いずこに留り給うか』39 イエス言い給う『きたれ、  
然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は  
第十時ごろなりき。

キリストは説明しないんだ、

「来なさい。従って来なさい。然らば見ん」

と。行為が先なんだ。ゲエテがヨハネ伝の最初の

「初めに言ありき」

というのをファウストをして

「初めに行為ありき」

と訳させた。さすがはゲエテだ。頭の信仰が多いからもつと行為的でなければダメだと、  
ゲエテは当時の教会の在り方を見て癪にさわっているから、

「初めに言ありではない。初めに行為が在った」

と言った。

実践しなければものを言つてはいけない。何か言ってから行うのではない、行つてから  
ものを言う。行為が優先、先なんです。これは我々の在り方としても非常に大事なことです。

「私はこうするよ」

ではない、

「私はこうしたよ」

でなければ。やった事を告白するならいい。

パウロが信仰のことを言うものだから、無教会の先生方は信仰のことばかり言つて、パ  
ウロがいかに行為的であつたかということがどつかへいつてしまっている。パウロの信仰



の面だけ言っている。信仰の奥に実は行為があつたことをもつと強調すべきであつた。カトリックでは「信仰と行為」ということをよく言う。カトリックは二本立てなことを言うから、

「そうではない、信仰だけだ」

とプロテスタントは言う。それでプロテスタントは信仰面になつてしまった。そうではないですよ、本当は。行為のみなんだ。

「初めに行為あり」

だ。さすがにゲートルはえらい。

### ●キリストの中に捨身

アッシジのフランチェスコも本当に行為のひとつだつた。どん底の行為の人だ。どん底的な人間というと、私はフランチェスコを思い出す。本当の捨身の行為なんです。仏教の偉大な坊さんもみな捨身の行為なんです。捨身とは素晴らしい言葉だね。自分の身体を、存在を捨ててかかる。捨身の最高なるものは、いうまでもなくキリストです。イエスは全く捨身のひとです。神さまに捨身している。だから、力はみな上からくる。

神の中に捨身する。我々はキリストの中に捨身する。そうすると力がくる。それで、それが本当の行為となつて展開する。一番先の行為は何かというと、捨身という行為です。捨身からいろいろな行為がでてくる。自分の身体をキリストの中に捨てなければダメです。そこから本当の行為がでてくる。あまり

「信仰、信仰」

と言うのは我々はもうようそうや。初めに行為あり、終りに行為ありだ。

「天国、天国なんてばかり言っている者はダメだ。行え。」

と、キリストもはつきり言っている。

「然らば凡て人に為られんと思うことは、人にもまたその如くせよ。」(マタイ7:12)

「さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬えん。雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言をききて行わぬ者を、沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬えん。雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし」(マタイ7:24～27)

と、マタイ伝7章に書いてある。「行う者」と書いてある。実存で生きる者。誰が天国に入るかといったら、そういう「行う者」だ。ただ信じて

「『主よ、主よ』なんて言っているのはダメだ」

と、キリストははつきり言つてらつしやる。





## ● われに従え

<sup>39</sup> イエス言い給う『きたれ、然らば見ん』彼ら往きてその留りたもう所を見、この日ともに留れり、時は第十時ごろなりき。

「ついて来なさい」

と。これも、

「従い来たれ」

ということ。「十時」というのは、午前6時から数えますから、午後4時になる。

<sup>40</sup> ヨハネより聞きてイエスに従いし二人のうち一人は、シモン・ペテロの兄弟アンデレなり。

もう一人はこのことを書いているヨハネだね。

<sup>41</sup> この人まず其の兄弟シモンに遇い『われらメシヤ（釈けばキリスト）に遇えり』  
と云いて、<sup>42</sup> 彼をイエスの許に連れきたれり。イエス之に目を注めて言い給う『なんじはヨハネの子シモンなり、汝ケパ（釈けばペテロ）と称えらるべし』  
<sup>43</sup> 明るる日イエス、ガリラヤに往かんとし、ピリポにあいて言う『われに従え』

これも「われに従え」だ。何だか分からないけれども、ピリポは従ってしまった。

<sup>44</sup> ピリポはアンデレとペテロとの町なるベツサイダの人なり。<sup>45</sup> ピリポ、ナタナエルに遇いて言う『我らはモーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者に遇えり、ヨセフの子ナザレのイエスなり』

「モーセが律法に録ししところ、預言者たちが録しし所の者」

とは即ち旧約で預言されているところの「メシヤ」のこと。モーセは現実にはキリストの預言をしているわけではありませんけれども、彼の言葉の奥にはそういうものがある。特に預言者になってからは、その預言がはつきりしてきたわけです。

<sup>46</sup> ナタナエル言う『ナザレより何の善き者かいづべき』ピリポいう『来りて見よ』<sup>47</sup> イエス、ナタナエルの己が許にきたるを見、これを指して言いたもう『視よ、これ真にイスラエル人なり、その衷に虚偽なし』

「ナザレに善き者があるか」

なんてはつきり言う正直な男だ、本当にユダヤ人らしい。その心の中に偽りがないと。想像してものを言わないで、はつきりものを言っている。

<sup>48</sup> ナタナエル言う『如何にして我を知り給うか』イエス答えて言いたもう『ピリポの汝を呼ぶまゑに我なんじが無花果の樹の下に居るを見たり』

これは肉眼で見たのではない。霊眼で見た。大変なひとだ、キリストというひとは。

<sup>49</sup> ナタナエル答う『ラビ、なんじは神の子なり、汝はイスラエルの王なり』

ナタナエルは驚いてしまつて、これも正直言つてしまつた、



「あなたは神さまの子だ。イスラエルのメシヤ、救主だ」と。

50 イエス答えて言い給う『われ汝が無花果の樹の下におるを見たりと言いに因りて信するか、汝これよりも更に大なる事を見ん』

イエスというひとは霊視しているんだね。これは肉眼で見ているのではない。

51 また言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、天ひらけて人の子のうえに神の使たちの昇り降りするを汝ら見るべし』

## ●天の門

これを読むと、創世記28章を思い出す。天にかかった梯子のことです。

「10 ここにヤコブ、ベエルシバより出たちてハランの方におもむきけるが、11 一処にいたれる時、日暮れたれば即ち其処に宿り其処の石をとり枕となして其処に臥て寝たり。12 時に彼夢て梯の地にたちいて其の巔の天に達れるを見又神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり。

このことです。

13 エホバ其の上に立ちて言いたまわく、我は汝の祖父アブラハムの神イサクの神エホバなり。汝が臥すところの地は我これを汝と汝の子孫に与えん。14 汝の子孫は地の塵沙のごとなりて西東北南に蔓るべし。また天下の諸の族汝と汝の子孫によりて福祉をえん。

イスラエルは救の源になるぞと。これは素晴らしい預言ですね。

15 また我汝とともにありて凡て汝が往くところにて汝をまもり汝をこの地に牽返るべし。我はわが汝にかたりし事を行うまで汝をはなれざるなり。

この辺は非常に著しいところです。

16 ヤコブ目をさまして言いけるは、誠にエホバこの処にいますに我しらざりきと。17 すなわち惶懼ていいけるは畏るべき哉この処これ即ち神の殿の外ならずこれ天の門なり。

## 「天の門である」

とまで告白してしまった。霊なる神は遍在している。そして、所々、その遍在して顕れる所は天の門であるというわけです。

18 かくてヤコブ朝つとに起きその枕となしたる石を取り之を立てて柱となし膏をその上に沃ぎ、19 其処の名をベテル（神殿）と名けたり。その邑の名は初はルズといえり。20 ヤコブすなわち誓をたてていいけるは、もし神我とともにいまし此のわがゆく途にて我をまもり、食うパンと衣る衣を我にあたえ、21 我をしてわが父の家に安然に帰ることを得せしめたまわば、エホバをわが神となさん。



そういうように本当に実行してくださるなら、それで初めて神とするという。

<sup>22</sup> 又わが柱にたてたる此の石を神の家となさん。又汝がわれにたもう者は皆必ず其の十分の一を汝にささげん。」（創世記28・10～22）

「十分の一献金」とかいうのはこのことから始まったんだね。

「<sup>4</sup> 汝らベテルに往きて罪を犯しギルガルに往きて益々<sup>ますます</sup>おおく罪を犯せ。朝ごとに汝らの犠牲<sup>いけにえ</sup>を携えゆけ、三日ごとに汝らの什一<sup>じゅういつ</sup>を携えゆけ。」（アモス4・4）

この「什一」（十分の一）のことです。

「神の使者の其れにのぼりくだりするを見たり」

ルッターがこれを援用して、彼の『クリスチャンの自由』の終りの方に、

「キリスト者もやはり、そのように天の使いがのぼりくだりするようなことになるぞで」

と書いている。

我々の現実とは、普通の現実とは違うところの霊的な現実なんです。だから、普通の人には分からん。私は詩を書いていますけれども、これも霊的現実で書いている。普通の現実ではない。

御国の夢を私は時々見る。夢に妹が出てきて、

「お兄ちゃん、どうしてこんな所に來たの」

「あとで、そっち側にいつてからゆつくり話すよ」

なんて会話する。妹（愛子）は小学校2年の時に猩紅熱で仆れてしまった。本当の現実というものは、霊的な現実是一種の詩の世界です。それが私には非常に現実なんです。不思議でしょうがない。

魂は別な――パウロが言っている通りに――霊の衣を着せられて、霊体になって新しく天界で生きているわけです。パウロのコリント前書15章に書いてある通りです。我々はいわゆる死ぬということはない。正に、往きて生きる往生です。霊的生命というものは凄い。私はいわゆる死を思わなくなってしまった。詩を書き終わるのがたとえ百歳を突破しても、私は使命のある限り生かされて、地上の時間的な長さというものはもう考えない。ありがたいね、本当に。

